氏　　名		徳　永　　崇
学 位 の 種 類		博士（音楽）
学 位 記 番 号		博音第１０号
学位授与年月日		平成２９年３月２４日
学位授与の要件		学位規則第４条第１項該当者
題目	学位論文題目	柴田南雄のシアター・ピースにおけるハイブリッド性の特徴 ―《氷口御祝》との類似点を手掛かりにして―
学位論文等 審 査 委 員		（演奏審査）　主　査　教　授　久　留　智　之 副　査　教　授　小　林　　聡 副　査　教　授　増　山　賢　治 副　査　教　授　福　本　泰　之 （論文審査及び最終試験）　主　査　教　授　久　留　智　之 副　査　教　授　増　山　賢　治 副　査　教　授　小　林　　聡 外部審査員　教　授　水 野 み か 子（名古屋市立大学教授）

学　位　論　文　の　要　旨

柴田南雄（1916－1996）の作品において、重要な位置を占めているのが「シアター・ピース」と呼ばれる作品群である。柴田のシアター・ピースについては、永原（2012）が定義するように「歌い手の意志による必然的な動作を伴った合唱作品であり、日本の民謡や民俗芸能・社寺芸能などを素材とした、多様な音楽が並置されたもの」という特徴が挙げられる。結果として、様々なテクストの混在、異なる音楽の同時共存等といったハイブリッドな様相を具現することに繋がっている。しかし、その変遷を辿ると作風は一様でなく、日本の民俗芸能や社寺芸能に取材した 1973 年から 1979 年頃、日本のみならず世界の様々な地域と時代の音楽、あるいは音楽以外の様々な分野に関するテーマ設定を試みる 1979 年から 1987 年頃、再び日本の民俗芸能に回帰する 1991 年以降の晩年、という 3 つの区分を見ることができる。

晩年における日本の素材への回帰は、岩手県遠野市小友町氷口地区に伝わる《氷口御祝》（すがぐちごいわい）との出会いが起点となっている。《氷口御祝》は、男女 2 グループに分かれた歌い手が、それぞれ別の歌を同時に唄うことで場を賑やかす祝い唄である。柴田は、異なる唄の同時共存という自らのシアター・ピースの特徴が、《氷口御祝》という日本の伝統音楽の中にも存在することを発見し、それを機に《遠野遠音》（1991）を作曲した。以降、地方に根付く文化や音楽への取材を中心とする「新しい」シアター・ピースの傾向は、《みなまた》、《深山祖谷山》、《三重五章》へと受け継がれていった。

筆者は、柴田の晩年のシアター・ピースのシリーズが、《氷口御祝》との遭遇を起点として始まる点に注目している。伝統芸能を素材にすることは勿論のこと、コラージュ等のハイブリッドな様相を生み出す手法自体にも、日本の伝統的な精神が潜んでいることにつ

いて、柴田自身が意識し始めた可能性があるからである。さらに、《氷口御祝》を視聴した際の柴田の「気付き」が、それ以前のシアター・ピース作品において用いてきた手法の再確認に繋がっている点にも着目している。ここでいう手法とは、即ちコラージュ等のハイブリッドな構造を志向する方法を指しているが、その他にも、異なる様式の楽章を並置するといった方法も認められ、これらを適宜混用しつつ、巧みに作品が構成されていると考えられる。そもそも、演奏者の身振りや配置等といったシアター的なアイディアと、素材を同時共存させたり、並置させたりする手法との間に、不可分な関係は存在しない。柴田の作品における両者の関係性はいかなるものであろうか。また、柴田のシアター・ピースに見られるハイブリッドな構造は、重要な取材源である日本の伝統音楽と、どのような繋がりを持っているのであろうか。

柴田のシアター・ピースと《氷口御祝》との関係に関しては、本人による著述も少なく、詳細に論じた先行研究も存在しない。また、日本の伝統音楽と柴田のシアター・ピースの関係性について論じた研究はいくつか存在するが、個々の作品に限定したものや、本人の著述を引用しつつ考察するものが中心であり、楽曲分析に基づいて構造の面からアプローチした網羅的な研究は見られない。そこで本論文では、異なる音楽要素が同時的に並置されたり、時間軸上に並列されたりすることによって生まれる多層的・多義的な性質を「ハイブリッド性」と捉えた上で、そのような傾向が随所に見られる柴田のシアター・ピースの構造について、《氷口御祝》との類似点を糸口にしながら解明しようと試みた。そのため、《氷口御祝》の実演記録の分析、及びフィールドワークを実施する他、柴田のシアター・ピース全作品におけるコラージュや並置等の手法の分析・分類を行った。併せて、シアター・ピースが生まれた時代背景や、日本の伝統音楽の背後にある特性との関わりについても触れ、柴田の作品に見られるハイブリッド性の特徴について、多角的に検証した。

本論文は、7 章から構成されている。第 1 章では、柴田のシアター・ピースが誕生した時代背景の把握を目的とし、1950 年代から 1990 年代に及ぶ国内外の音楽動向について、関連の深い事項を整理した。引用やコラージュ、日本の伝統音楽への関心等、当時の世界と日本における動向が、柴田の創作スタイルを生み出す地盤となっている点について確認した。

第 2 章では、柴田の創作活動におけるシアター・ピースの位置付けを行った上で、その概要について述べた。まず第 1 節と第 2 節において、作風の変遷、及びシアター・ピース・シリーズの重要性について述べ、第 3 節では、柴田のシアター・ピースを内容の面から 8 つのカテゴリーに分類した。また第 4 節では、構成を担当した純子夫人の多大な影響について論じ、第 5 節では、《氷口御祝》が契機となった《遠野遠音》の成立過程を分析することにより、コラージュ的な手法と日本の伝統的な素材との繋がりが、柴田自身によって再確認された可能性を指摘した。

第 3 章では、実演記録 VTR を基にした構造の分析、及び岩手県遠野市における聞き取り調査の結果を踏まえて考察を行い、《氷口御祝》の実態について明らかにした。その結果、《氷口御祝》のアンサンブルは、女声群が男声群に「合わせる」スタイルであることが明らかとなった。

第 4 章では、スコアを用いて《遠野遠音》を分析し、《氷口御祝》からの影響について

考察した。《氷口御祝》で見られた、「異なる歌の同時的並置」が部分的に援用されていることが明らかとなった。

第 5 章では、柴田のシアター・ピース全作品の実態を把握するために、構成、素材・テクスト、演奏形態等の特徴を抽出し、表にまとめ、続く第 6 章では、そこで得られたデータを精査・分類し、柴田のシアター・ピースに見られる特徴及び傾向について述べた。まず第 6 章第 1 節では、「シアター的要素」「日本の素材」「海外の素材」「ハイブリッドな構造に繋がる要素」に着目して各作品の要素を分類した。それに基づき、第 2 節では、「シアター的要素」における 3 つの要素が、相補的な関係にあることを指摘した。第 3 節では、年代ごとの変遷に着目し、初期と晩年において日本の伝統的な素材を多く用いる傾向にあることを指摘した。さらに第 4 節では、柴田のシアター・ピースの重要な特徴となっているハイブリッド性について検証し、全体を通してコラージュを中心とした「素材の同時的共存」が見られること、及び 1979 年以降「水平的な並置」が行われるようになったとについて述べた。

第 7 章では、柴田のシアター・ピースに見られるハイブリッド性のパターンを明らかにし、その背後にある社会的・文化的背景について考察した。第 1 節では、第 6 章における要素の分類を踏まえ、ハイブリッド性を具現する特徴として「素材及びその展開方法の多様性」及び「異なる音楽的事象の共存」の 2 点を挙げた。特に、後者の重要な手法であるコラージュが、シアター的な手法及び日本の伝統的な素材と密接に繋がっている点について指摘した。第 2 節では、日本の伝統音楽や文化の中に見られるハイブリッドな構造を挙げ、柴田のシアター・ピースにおける日本音楽の援用が、素材のみならず、構造面にまで及んでいる点について論じた。

演 奏 審 査 結 果 の 要 旨

「ハイブリッド」（異種のものの混在、雑種）というある種の方法論をテーマに据えた作品個展であり、博士課程学位取得論文もそのテーマの観点から一人の作家を解析したもので、創作実技と論文が一環した態度に貫かれている点は、注目に値する。「ハイブリッド」が、歴史的に美学を含む日本的な様相を生み出す方法論として作用しているのではないかという問題意識から、作品制作や論文の切り口としている点は独創的である。

個展の出品作品は、2009 年制作のものから 2016 年の新作までの 6 作品であるが，作曲家の興味は上記のようにさまざまなハイブリッドの様態を生み出すその方法論の探求にある。結果として聞こえてくる音楽は、ユーモラスな面も感じさせ、この作家の個性が際立っている。一聴してキャッチーな音楽は、しかし確かな作曲テクニックに裏打ちされたものであって、音型の様々なヴァリエーションなどの緻密な設計から紡ぎ出されるものである。楽曲編成は、現代日本で誕生した音楽であることを想えば当然ではあるが、主に西洋音楽で主役をになうピアノやヴァイオリンなどに留まらず、チューバやサクソフォンや声（バリトン）、さらに非西洋楽器である箏も加えられていて、それ自体もハイブリッドな様相を呈している。初演作品については、これまで積み重ねてきた「ハイブリッド」という切り口から、少し距離をとり始めたように感じられ、他の審査員からも「作曲家の個性とその作曲家が置かれた時代や環境の状況によって変化するという意味で、作曲者は

すでにハイブリッドの先に有るものを見据える段階にあると推測された。」との評価あり今後の展開がいっそう期待されるものであった。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本研究の出発点は、申請者の音楽における「多時間構造」への興味からであったが、そのような構造を持つ楽曲を調査しているうちに遠野市の『氷口御祝』という民謡と謡曲を同時的に歌う伝統歌謡に出会ったことによっている。その楽曲の現地でのフィールドワークや専門家への聞き取り調査などによる綿密な調査と楽曲を楽譜におこし可視化することでその構造を解析しているが、その部分は極めて優れている。これは平素からの拡張された楽音を記譜する作曲家としての技術があって初めて可能になるもので申請者の専門性がよく発揮されている。３年という研究期間のなかで、この『氷口御祝』が柴田南雄にも多大な影響を及ぼしていることを知り、多時間構造を含む「ハイブリッド」という切り口で柴田南雄のシアターピース作品についての研究に広がりをみせている。柴田のシアターピース作品のほぼすべてにわたり構成、素材・テキスト、演奏形態などについて調査し一覧表にまとめ上げた部分も柴田夫人や初演した指揮者からの資料提供や聞き取り調査などを行っており労作である。今後の柴田研究の一助となることは間違いないであろう。本研究は結論において、柴田のシアターピースの特徴がその「ハイブリッド性」（「異なる音楽要素が同時的に共存したり、時間軸上に並置されたりすることによって生まれる多層的・多義的な性質」と定義されている。）という方法論にあり、それは日本の伝統的な身の方法論のひとつであることの気づきが記されている。作曲家と音楽者という両面を持っていた柴田が芸術音楽の潮流を大きな歴史の中で捉えていたことを考えると、この気づきは大変重要な意味を今後の柴田研究にもたらす可能性があるように思う。「ハイブリッド性」という方法論を用いることで柴田は何を表現したかったのか、またそれはなぜなのかというより大きな命題へ今後も継続して研究を進めてもらいたい。

最 終 試 験 結 果 の 要 旨

論文と作曲の研究対象が明確にリンクしていて、それぞれの方法論がそれぞれの内容に活かされている。本申請者は、作曲家としてはすでに知名度も高く国内での評価も高まってきているが、研究論文と作品創造の相互のフィードバックという今回の経験が今後の活動につながるものとなることを期待している。特に結論にあった日本の伝統的方法論の新たな展開の可能性は、日本から世界に発信しうるような芸術音楽の創造に結びつくものであり、「芸術の音楽」の創造の歴史をまだ長くは持っていない日本にとってきわめて重要であり高く評価される。